

## 出張報告書

平成21年3月  
小松久恵

### 1. はじめに

平成21年1月より、新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」が始まった。報告者が所属する第5班は、「国家の輪郭と越境」を研究課題としている。その目標は国家という輪郭がどのように成立し、またそれがどのように変容していくのかを明らかにするものであり、特に国家の中のマイノリティによる表象に注目している。報告者はこの班の研究協力者として、「インド」という概念の成立と変容を検討すべく、特に近代インドにおいて活躍したキリスト教団体の活動と、同時期のインド社会側からの西洋近代に対する反応を明らかにするため、同国での資料調査を行った。これはその出張報告である。

### 2. 日程

1月28日

午前 関西空港発

夜 インディラ・ガンディー国際空港着（経由国タイ・バンコク）

1月29日

午前 国立ネルー記念博物館／図書館（Nehru Memorial Museum & Library 以後 NMML）訪問  
図書館利用許可の申請および開架の書籍・雑誌調査

午後 都市部の本屋（Full Circle, Khan Market）見学

1月30日

午前 NMML で事務手続き

午後 前日の本屋再訪、資料収集

1月31日

タクシーにてグルガオン市へ、古書店にて資料収集

2月1日

午前 インド人研究者訪問

午後 本屋 Full Circle 訪問、資料収集

2月2日－2月6日

午前 NMML にてマイクロフィルム閲覧

午後 NMML 開架にて関連書籍調査、並びにコピー依頼

2月7日

オールドデリー市の出版社（Oxford University Press、Manohar、DK Publishers）にて資料収集

2月8日

滞在先にて資料整理

2月9日－13日

午前 NMML にてマイクロフィルム閲覧

午後 NMML 開架にて関連書籍調査

2月14日

オールドデリー市の出版社（DK Publishers）にて資料収集

2月15日

インド人研究者訪問

2月16日－2月18日

午前 NMML にてマイクロフィルム閲覧

午後 NMML 開架にて関連書籍調査

2月19日

午前 NMMLにてマイクロフィルム閲覧  
午後 デリー大訪問、日本学科の講師と意見交換

2月20日

デリー出発

2月21日

帰国

### 3. 日程における特記事項

- (1) NMML 利用にあたって担当者に利用許可申請に必要な書類を尋ねたところ、大阪大学からの在職証明書のみでよいとのことだった。以前、報告者が留学生として使用した際には大使館からの証明書が必要であったのだが、よって大使館へ行く必要がなくなる。書類に必要事項を記入し、在職証明を添付して提出。一年間のメンバーシップ料500Rsを支払うと、翌日から利用可能となった。NMMLの職員はみなかなり有能で、仕事が早い。インドの他のどの図書館にも望めない手際のよさである。そしてスタッフはみな、ここで働くことにはかなりの誇りを抱いているように感じた。

NMMLのマイクロフィルムセクションは週に一度、金曜の10時からのみ予約を受け付けており、午前か午後のどちらかのセッションしか予約をすることができない。全部で8台（故障中のものを除くと5、6台）しかマシンがないので午前の部の席はすぐに予約でうまってしまう。図書館全体の利用者は、原則として修士以上の人文・社会科学系の研究者ならびに執筆活動中の者とされており、マイクロフィルムセクションも大学関係者ならびにジャーナリストが利用者の中心となっている。その多くがラップトップコンピュータを持参している。

- (2) NMMLは、国際的なセミナーやシンポジウムを多く開催しており、報告者の滞在中にもガンディーの非暴力関連やチベット関連のセミナーが開催されていた。またNMMLは研究員を擁しているが、この研究員であることはアカデミックの世界において非常に高く評価される。



NMMLの敷地内は大変よく整備されており、夕方になると野生の孔雀が現れる。



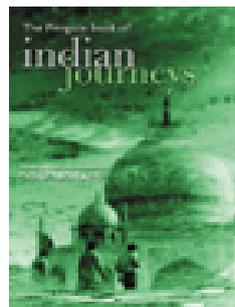
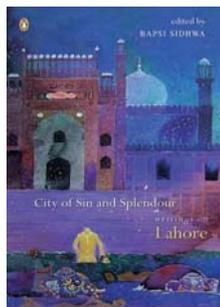
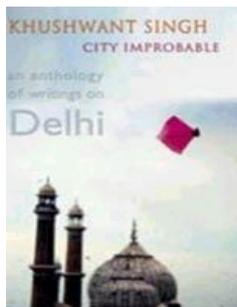
チベット関連のセミナーが開催されていた期間、図書館の入り口には花びらで曼荼羅が作られていた。

- (3) 著者が何度か訪れた本屋（Full Circle）は、高級マーケットと呼ばれる場所に位置し、訪れる客の中心はデリー在中の外国人ならびにアッパーミドルクラスのインド人である。英語による作品が大半であり、インド諸語によるものはほんのわずかしは見当たらない。写真集から学術書、小説、実用書まで品揃えはかなり充実しており、配置の仕方も外国人の目を引くものとなっている。小説の棚には、国内外に住む人気インド人作家の作品が多く並ぶ。また外国人によるインド旅行記のみでなく、インド人自身による旅行記、滞在記、並びにそれらのアンソロジーが多く目に付いたが、これはここ最近の傾向だといえよう。この本

屋の品揃え、そして客層、売れ筋作品を見ているだけで「最新インド」の文学動向が見えてくるような気分になる。



高級マーケット内の雑誌屋。英語雑誌が主流であり、輸入誌も多く見られる。



今回よく目についたインド紀行文のアンソロジー。2001年から出版が相次いでいる。

(4) ここ数年、デリーからグルガオン市に向かう道は常に混雑している。さらに2年ほど前から、デリーとグルガオン市を結ぶ地下鉄が建設されつつあり、その混雑に一層輪をかけている。報告者が訪れた古書専門店はオールドグルガオンと呼ばれる旧市街の市場にあり、まるで迷路のような小さな路地を抜けていくため、何度訪れても独力ではたどり着けない。必ず店員に中心部まで迎えに来てもらう。1920年代発行の雑誌Chand(Vol.10 1932May-Oct)や、キリスト教団体の活動を含む、近代インドの教育状況に関連する書籍(*Higher education in India in the 19th century; the American involvement, 1883-1893/ Bethune School & college; centenary volume 1849-1949* 等)をいくつか購入することができた。

(5) 今回、マイクロフィルムでまず閲覧したのはChand誌(1922-34年分の6巻)である。チャンドは1920-30年代の北インドで絶大な人気を誇ったヒンディー月刊誌であり、その発刊目標は女性の地位向上であったがその構成は女性問題に限定されず、広く文芸誌としても高い評価を得ている。当時、最も多い発行部数を誇った雑誌であり、最大時には15000部が発行された。また創刊者Ramrakh Sigh Sahgalの編集姿勢として、政治・社会問題に対しても大胆に切り込んでおり、同誌は時に告訴、罰金、学校指定図書書の停止、発禁処分などを経験している。同時にサハガルは女性読者との交流を重視しており、読者投稿欄はかつてない規模で充実している。そうした意味でもチャンドは広く知られた雑誌であり、時代のオピニオン・リーダー的な存在であったといえよう。

今回、雑誌を見る上で特に注目したのは、

1. 読者投稿欄にみる読者の自己認識ならびに自己表象
2. *Mother India*(1927)ならびに*Slave of the Gods*(1929)へのインド社会からの反応
3. 当時のキリスト教団体にむけた視線

の3点である。

時間の制限もあって今回の滞在中は必要箇所を選択し、書き出して複写依頼をして資料を入手できたのみである。これから詳細な分析に入る。1. に関しては特に1932年から34年までのものをほぼ毎号入手することができた。以前に入手していた分と合わせて検討することで、最も投稿が盛んであった1930年代の5年間に的をしぼり、読者投稿の傾向をより明確に指摘することができると思われる。

また2. はアメリカ人女性によるインド社会を舞台にした一種の紀行文ならびに小説であるが、作品に一貫するテーマはインド社会批判であり、出版された当時、国内外で大きな話題となった。当時のインド社会の主な反応は、当然この著に対する批判・否定であったが、チャンド誌にもこれらの著に対する批判がいくつか掲載されており、その分析によって世論の傾向を把握することができよう。同時に、興味深いことには

チャンド誌にはこの作品を支持する文章も掲載されている。その文章を分析考察することで、当時のインド社会からの反応を重層的に提示することができると思われる。

3. に関しては、想像していた以上に関連記事を見つけることが困難であった。編集長サハガルによる記事で、表題に「キリスト教団体」「キリスト社会」を含むものが数本見つかったのみである。表題に関心をしぼり、長い記事の中で部分的に言及されたものについてフォローしえていないためかとも思われる。あるいは当時のチャンドを取り巻く環境下では、キリスト教団体に関してさほど注意が払われていなかったという可能性も捨てきれない。南インドにおいてキリスト教団体が大きく活躍したのとは対照的に、北インドにおいてのその存在感がさほど大きくなかったことの表れとも考えられるだろう。今後、より正確な分析が必要である。

- (6) その他、マイクロフィルムで閲覧したのはキリスト協会に関するリール数巻 (American Baptist Foreign Mission Societies Records, 1817-1969) である。ミッション女性がインド人家庭に入り込み、家庭内で女性に教育を行う「ゼナーナ教育」に関するレポートを探す目的であったが、そのようなレポートを見つけることはできなかった。ゼナーナ教育が行われていたのは、19世紀以前であったということだろうか。その代わりに、南インドの看護学校に派遣された女性たちの日記を入手することができた。日記に現れる地元社会との彼女らの交流は非常に興味深く、よりいっそうの資料収集と分析考察にはげみたい。

また、出張の後半では女性団体 (All India Women Conference / National Council of Women in India) の年報 (1927-1935 / 1926-1934) を中心に閲覧した。キリスト協会の活動に関する反応などが知りたかったのだが、特に記述は見当たらなかった。しかし報告者のまた別の目標であった、刑務所に関する記述が発見されたのは嬉しい収穫であった。団体において、刑務所への訪問が活動目標としてあげられており、同時に刑務所の環境改善が議題となっていた。これは時期としては女性の独立運動参加が増大し始めた頃のことであり、政治犯として投獄されるエリート女性の待遇が問題となっていた。一般囚人への関心と比較することで、当然のように存在するカーストシステム、それに対する一般的な意識など、非常に興味深いテーマに結びつくと思われる。また会における女同士の力関係など、これまで想像上のものでしかなかった現実が垣間見られたのも、興味深い発見であった。

- (7) これまでの経験によると、マイクロフィルムのコピーは入手するまでに非常に長い時間がかかる。今回も係員から最低3週間は必要だと言われたため、できるだけ早く全巻を見終え、必要部分を書き出してコピー申請を行った。このコピーは、普通の紙媒体のものとは異なり、非常に煩雑な手続きが必要でありかつ高価である。一般のコピーは一枚1ルピー、大学内ではその半分の値段で行われているが、このコピーはA4サイズ一枚につき、最低20ルピー。記事の大きさによっては倍の値段となる。これが高いか安いかは、この資料を報告者がどのように活かすことができるのかで決まるのだろう。ちなみにNMML内のキャンティーンで出されるチャイは、一杯3ルピー程度である。

5日の時点で依頼を終え、報告者の出国日である2月20日までに受け取ることができるよう念を押す。有能そうな担当者はしっかりと肯定してくれたのだが、結局18日に訪れてみると、機械の故障とのことで依頼の半分しか入手できず。残りは友人に託すことにした。

- (7) オールドデリー市はニューデリーとは町の雰囲気が大きく異なる。古い建物に囲まれ小道が多く、雑踏が広がっている。本屋や雑誌屋などの店構えや品揃えも、ニューデリー市のそれとは大きく異なる。



オールドデリー市の中心的マーケット



マーケット内の本屋。ウルドゥー語のものが中心。

- (8) ニューデリーからオールドデリー、その先のデリー大学までは地下鉄が通ったために非常に行きやすくなった。以前は1時間以上かかった道のりが、今では30分足らずである。路線によって混雑の度合いや乗客

の階層が大きく変わるといわれるが、報告者が利用したデリー大学行きの線はさほど混雑もしておらず、非常に使いやすかった。



地下鉄構内



地下鉄路線図



地下鉄案内表示



デリー大学キャンパス



日本学科が入っている建物



日本学科のプレート

#### 4. 所感

- (1) この度出張では NMML 内にあるマニュスクリプトセクションで十分な資料調査を行う時間的余裕がなかった。当セクションには、インド史上重要な人物や団体による、未出版の書簡や日記、あるいは会報などが収められている。次回出張では当セクションを中心に、キリスト教団体による女子教育普及に関連した資料収集に努めたい。
- (2) この度の調査は、資料所在の検討がついていたためデリー市所在の NMML において行った。しかし近代インドにおけるキリスト教団体の活動や、宣教師などによるインド滞在記等に関しては、当時の活動中心地であったカルカッタ所在の国立図書館 (National Library of India) に、より多くの資料が所蔵されている可能性が大きい。NMML において十分な調査を行ったのち、カルカッタおよび英国での調査を行いたい。
- (3) マイクロフィルム調査に関して、今後より効率的かつ確実な作業方法を考える必要がある。コピーに時間がかかり、また入手できてもその質は不均一で、フィルムの状態によっては判読が困難である。この度も出張終了間際に、コピー機の故障を告げられ、依頼の半分が入手できたのみである。またその中でも判読困難なものはいくつかあり、次回の訪問時に確認する必要がある。結局、最も確実なのは、コンピューターを持ち込んで打ち込むか、ノートに書き写すといった地道な作業ということになるだろう。
- (4) 今後の研究課題の一環として、現代のインド人自身によるインド認識の考察を行う。異文化に触れることが、自身の帰属文化の相対的な認識につながる、という前提のもとに、デリー大学の研究者に協力を依頼し、日本語・日本文化を学ぶ学生によるインド認識の考察を検討したい。